

ロディ・ドイルの「動物たち」

—翻訳と考察—

● 香山 はるの

1. はじめに

ロディ・ドイル (Roddy Doyle, 1958-) は現代のアイルランドを代表する作家の一人である。1987年、『ザ・コミットメンツ』(*The Commitments*) で華々しくデビューして以来、ドイルは小説家として成功の道を歩んできた。最初の三作—『ザ・コミットメンツ』と『スナッパー』(*The Snapper*, 1990年) 及び『ヴァン』(*The Van*, 1991年)—は、『バリータウン三部作』("The Barrytown Trilogy") と呼ばれ、幅広い人気を獲得した。いずれもダブリン郊外の架空の町、バリータウンに暮らす労働者階級の人々を描いた作品で、大らかな笑いと温かさに満ちている。そして次の『パディ・クラーク ハハハ』(*Paddy Clarke Ha Ha Ha*, 1993年) において、ドイルは主人公／語り手である10歳の少年パディが家庭の崩壊にもめげず成長していく姿をユーモアとペースを込めて生き生きと描写した。これらの作品に共通する大きな魅力は、物語の中心となるキャラクターたちの明るい逞しさ、生命力である。

一方、ドイルが作家としてこれまで様々なテーマやジャンルにチャレンジしてきたことも注目に値する。たとえば1996年の『ドアにぶつかった女』(*The Woman Who Walked into Doors*) では家庭内暴力という深刻なテーマが扱われている。ドイルは、17年間夫に暴力を振るわれてきた中年の女の視点から、愛と憎しみ、支配と依存といった男女の複雑な関係を追及した。また、『ヘンリーという名の星』(*A Star Called Henry*, 1999年) で始まる三部作 (*Oh, Play That Thing* [2004年], *The Dead Republic* [2010年]) では、スラム街出身のヘンリー・スマートの成長と冒険が、20世紀のアイルランドの激動の歴史を背景に力強く描かれている。さらに、ドイルは短編や子供向けの本、戯曲も執筆しており、非常に守備範囲の広い作家と言える。本稿では、日本ではまだ翻訳が出ていない2011年の短編集、『闘牛』(*Bullfighting*) の中から「動物たち」("Animals") という作品を取り上げ、訳してみたい。この短編集に収められた作品は全て中年男性の孤独や喪失感に焦点を当てているという点でユニークであり、ドイルの新たな挑戦という意味でも興味深い。

2. 翻訳「動物たち」

彼は今思い出している。階段や子供につまづいたりしないように気をつけながら、水槽を家の中に入れたことを。息子たちはとても小さかった。娘たちは一双子のことだが—すごく小さかったに違いない。今となってはどんな風だったか想像すらできないのだから。水槽に水を入れたこととか魚をその中に放り込んだこととか、そうしたことは覚えていないが、息子たちが魚一匹一匹に名前をつけて、長男のベンが太い赤いマーカーでそれをリストにしている間、自分は水槽の前で足を組んで座っていたのは覚えている。魚が7匹いて、名前が7つつけられた—ゴールドイ、スペックリー、ビッグ・アイズ、それからあと4つ。子供たちはリストを水槽の脇にテープで貼ったが、その日のうちに3つの名前が黒い線で消され、4匹の魚が水槽に残った。水槽はずっとあの部屋にあった。—実際、2年後に引っ越すときにもジョージは水槽をそこに置いたまま

にした—あれは最後の生き残りの1匹を埋葬してから随分経った頃だった。

動物たちにはいつだってちゃんとした、手の込んだ埋葬をしてやった。キリスト教式、ヒンズー式、無宗教葬—子供たちが学校で習ってきたちょっとした知識や訳のわからないことは全部葬式に盛り込まれた。ジョージは携帯電話を何度か変えた—そうしたかったからというより、携帯についてくる箱が便利だとわかっていてから—一次に死ぬ鳥や魚のために棺桶の準備をしておくことはいつだって賢明なことだった。

ある土曜の朝、彼は家に帰って来た。イギリスに行っていたのだ。家は空っぽだった。妻のサンドラは、ウェックスフォードの母親の家に子供たちを連れて行っていた。ジョージがカバンを下ろしてやかんのところへ行くと、真新しい鳥かご—それからカナリア—に気がついた。そして、またまた赤いマーカーのメモ書きがあった。「餌をあげて。」もちろん、もしそのカナリアが生きていたなら、喜んで餌をやっただろう。彼はシャワーを浴びて、電話でタクシーを呼んで1時間待ち、それから運転手にドナミードのペット・ショップ、ワッカーズに行ってくれと言った。

—本気かね？と運転手は言った。

—ああ、とジョージ。

—ワッカーズに何があるってんだい？

ジョージはタクシーが動き出すのを待ってから言った。

—ペットだよ。

我ながらこの答えが気に入った。

—わかった、と運転手は言った。

彼は捨て子の頭をもぎ取るような勢いでギアを入れた。

ワッカーズには—いや、他のどの店にも—カナリアはなかった。ウッディーズの隣でもカナリアはないと言うし。パーネル・ストリートの店にもなかった。次の日子供たちが家に帰ってきたとき、あのカナリアは2羽のフィンチに変わっていた。ジョージは理由を説明したけれど、子供たちにはどうでも良かった。何にせよ二つの方が一つよりもいいじゃない。

—飛行機に乗っていた人が教えてくれたんだ。カナリアよりフィンチの方がずっといいってね。だからパパはあのカナリアをこいつらと交換したのさ。1羽は男の子、もう1羽は女の子なんだよ。

—かっていい。

実はあの時ジョージはフィンチが本当にオスとメスのつがいなのかかわかっていなかった。でもそうだったに違いない、なぜってフィンチは巣を作って卵を一つ産んだのだから。でも、卵は孵らなかった。サンドラが本と、もっと大きな鳥かご、もっと良い巣づくりの品を買うと、2羽のフィンチは3羽、5羽と増えていき、そしてまた4羽、3羽、2羽と減っていった。葬式が増え、庭に埋めた死骸も増えた。それからもっと大きい鳥かご—車輪つきのでっかいやつ—を買った。あのフィンチのピートとエイミーは—今だって子供の名前みたいにしっかり名前を覚えている—鳥かごのてっぺんの隅に蜂の巣みたいな巣をつくった。エイミーは巣にこもり、ピートは出てきて、止まり木に留まって賢そうにしていた。

ある日ジョージは母親の家に行き、電球をいくつか替えたり、ガラクタを屋根裏に入れてやった。こうしたことを午前中にやり、読みだした本をこっそり持ち出してテイクアウトのコーヒーを買うと、車で海岸通りまで行き、母親の家の仕事を終えてから1時間そこにいた。ヨーロッパの方角に車を停めて『マンボ・キングス、愛の歌を歌う』を章の終わりまで読んで—それから小便をしに行った。家に帰るとうちの中はこの世の終わりのような騒ぎになっていた。サンド

ラはその朝何かイベントが必要だと思い、子供たちと鳥かごを外に出して、石鹸をつけたブラシと布切れを使ってかごの掃除に取り掛かった。しかし、子供たちの誰かがかごの戸を開け、ピートが逃げ出してしまった。ジョージが目にしたのは、台所で涙や鼻水といった段階はとうに過ぎてヒステリー状態になっている4人の子供だった。そして裏庭ではサンドラが生垣に向かって何やら話しかけていた。

—ピートの声がするわ。

—どこで？

—あそこ、と彼女は言った。

サンドラは生垣を指さしたものの、生垣は家から庭の端まで及んでいた。長い庭で、生垣も広い。

—ピートの声よ。

ジョージにはうちの中で大騒ぎしている子供たちの声が聞こえた。芝刈り機の音、2、3匹の犬の泣き声、それから自分はバリー・ホワイト²だとでも思っている3軒先のろくでなしの歌声。でもピートの声は聞こえない。その代り聞こえた—そう、確かに聞こえたのだ—すごいアイディアが大きな音を立てて自分の頭にひらめいたのだ。

—聞いてくれ、と彼は言った。—子供らをこれからワッカーズに連れて行く、ピートが戻ってきていないか確かめにな。俺が言ってること、わかるか？

サンドラは彼を見つめた。ジョージにはわかった。妻がもう一度彼に恋しているのを。或いはこれが初めてなのかもしれない—どちらだって構うものか。ガウン姿で、うろたえている様子も魅力的な女がいて、俺を「ER緊急治療室」³に出ている若い男みたいにじっと見つめているじゃないか。

—俺がそうしている間に、とジョージは言った—君はワッカーズに電話して話を合わせておいてくれ。わかるね？

—素晴らしいわ。

—うまくいくかもしれない。

—天才的よ。

—まあね。

実際これはうまくいき、ジョージの最大の功績となった。うちに幸せをもたらし、伝説を確立し—我ながら最高に誇らしい時だった。

ワッカーズの店員たちは皆忙しそうな振りをして、ジョージと子供たちが来るのを待っていた。ジョージは娘二人を抱いてカウンターまで行った。息子たちも彼にぴったりくっついていた。

—このディランのフィンチが逃げてしまって、とジョージは言った。—それで、もしかしたらここに帰って来たんじゃないかとディランは思っているんだが。

カウンターの後ろにいた男がゴムバンドでまとめていたレシートの束から目を上げた。

—^{しま}編のあるフィンチかい？

ディランはうなずいた。

—20分前に来たよ。

1 オスカー・イフェロス（1951-2013）が書いた小説。1990年度ピューリッツァー賞を受賞。

2 アメリカの人気シンガー・ソングライター。1970年代に活躍した。

3 1994年から10年以上にわたって放送された人気の医療ドラマ。ここでいう「ER緊急治療室に出ている若い男」というのは、ダグラス・ロス役のジョージ・クルーニーのことか。

—あいつは疲れ切ってたね、と藁と乾草の小さな束を積み重ねていた年配の男が言った。—くたかったよ。ディラン、あっちに行って奴を見つけてごらん。

ベッドルーム位の大きさの鳥かごの中でフィンチが30羽飛び回っていた。ディランはかごの前まで行かないうちに指を差した。

—あれ。

—あいつかい？

—うん。

年配の男が小さな横の扉を開けて手を入れた。網を持ち、フィンチをつかんで外へ出したが、その速さといひしなやかな動きといひ、リハーサルしたいみたいに見事だった。

—こいつがそうかい？

—うん。

—名前は何だったけか？

—ピート。

この新しいピートは前のピートとは比べものにならなかった—ちょっと麻薬でもやっているような顔をしていた。ジョージはフィンチは好きだったが—糞だの紙やすりだの、餌だの水だの—頭痛の種でもあった。いつかはゴールウェイへ行く途中で引き返さなければならなかった。鳥のことを、誰に鳥の世話をしてもらうのかを、忘れていたからだった—2週間留守にする予定だったし—ひどい匂いのする台所、鳥かごにはちっちゃな鳥の死骸でいっぱいの家になんて帰れないから。結局近所の人が喜んで鳥の面倒を見てくれることになり、1日遅れで再出発。サンドラはジョージに困ぎしりするのはやめてと言ったが、彼は自分がそうしているとは知らなかった。でも別の時—また、家での話だが—ジョージは普段より早く起きた。台所に行くとディランが明け方の光の中で鳥かごを、ピートとエイミーをじっと見つめていた。ジョージはそこに立ってディランを眺めた。あれも素晴らしいひとときだった。このために俺は生きているんだと感じた。

ジョージは今新しい犬を散歩させている。キャバリア・スパニエル、レスキュー・ドッグ。彼は傍らで小走りしている犬をみて、「保護」とはどういう意味なのかあらためて考える。申し分のない犬なのだが、前の飼い主から保護される必要があった。彼は好んでこの犬の散歩をしているが、他にすることがないからでもある。子育ては終わり、失業中の身。慣れてきてはいら—そのどちらにも。電柱という電柱には雨や暑さにさらされた選挙のポスターが貼ってある—6月の初めて天気は素晴らしい。

あのモルモットがうちにいたのは1日半だったが、我が家に喘息をもたらした。ジョージが仕事から帰って来ると—あの時の感じは覚えている—息子たちが「ズボン芸」を披露してくれた。

—ねえ、見て、と息子たちは言って彼を新しい檻のところへ連れて行った—また新しい檻だ。中には2匹のモルモットが細かく切り裂いた『イブニング・ヘラルド』紙の下にいた。長男のベンが檻を開け、1匹つかむと、ジョージの反対は—まだ口にしていない漠然としたものだったけれど—たちまち粉々になって消えてしまった。ベンのあの自信、檻に入れた手や腕の確かな動き—この子は外科医になるぞと思った。ベンは両手でモルモットを抱いた。

—なんて名前だい？

—モルモット、とベンは答えた。

ベンは台所の床に腰を下ろした。ディランがもう1匹のモルモットをつかみ、兄の横に座った。—見えて。

二人は足を伸ばし、広げて座った。夏だったので半ズボンをはいていた。そしてモルモットは

—ズボンの片側の足に入れられた。ジョージはモルモットが苦勞して息子たちの足を上って行くのを見、また、二人が足をまっすぐに伸ばしておこうとして、笑ったり叫んだりしているのを聞いた。ディランは座り直してズボンの片側を下に引っ張り、モルモットが股の分かれ目を通してもう片方の足に渡りやすいようにした。それは楽しい光景だった—そして、ベンは実際にはバーテンダーになった。その晩ベンは咳が出てぜいぜい息をするようになり、血が出るまで両足をかきむしった。目は真っ赤に充血して顔に不釣り合いな大きさまで腫れあがった。突然アレルギーと喘息持ちの子供ができて、モルモットは他所へやられ—代わりにウサギが来たのだった。

最初の犬がウサギの1匹を食べてしまった。食べられたのは一番初めに飼ったウサギのうちの1匹だったのか、ジョージにはもうわからなくなっている。今から行ってみようか。散歩の途中だが、方向を変えてベンの仕事場に行ってみるか、ジョージの行きつけのパブの隣りだ—歩いて15分—そしてベンに聞いてみよう。午後の早い時間なので店も静かだろう。犬を外の自転車置き場につないで、さっと一杯ひっかけるかコーヒーでも飲もう—自転車置き場のあるパブのコーヒーも悪くはないだろう—そうしてみるか—時間はあるのだから。けれども、切羽詰まっているようには見られたくない、実際その通りなのだから。

「失われた10年間」—ノーベル賞を取ったポール・クルーグマンというアメリカの経済学者がテレビでそう言っていた—2、3週間前のことだ。この10年のことを言っていたのではない。これからの10年だ。既に名前までつけられていて、ジョージは全くお手上げだった。

モルモットを厄介払いすることがすぐに決まり—あのモルモットはどうなったのか、今ではさっぱり覚えていない。これもベンに聞いてみよう—家は壮絶な悲しみに見舞われた。実際ベンは背中をかきむしってTシャツを破ってしまった。

—僕のせいだ！僕が悪いんだ！

—おお、そんなことはないよ。

—僕のせいなんだ！

皆で車に乗りこみ、ワッカーズの店へまっすぐに向かった。あの時俺は働いていたのだろうか？ジョージの記憶は色々な車や過ぎ去っていった年のことでびっしり、喜んだり悲しんだりしている子供たちでいっぱいだ。ジョージは信号機をどなりつけ、子供たちの気をそらすためブリテンダーズやユーリズミックス、ポークスのベスト・アルバムに合わせて歌を歌わせた。「500万の豚、600万の犬に700万バレルの黒ビール。」^{ポーター}「サンドラはベンの手を握ってペット・ショップの中をあちこち歩いては息子の目を見た。モルモットには近づかないようにした。ウサギが入ったバケツのところでは、バケツに向かってベンを傾けてみた。

—息をして。

—ママ、僕、息してるよ。息しないわけじゃないじゃん。

—ちょっと見せてごらん。

ジョージはサンドラがベンを目や顔をチェックしているのを見ていた。他の子供らは外の入口に待たせていた。ベンがこのテストにパスせず、手ぶらで家に帰ることになっても、あの子たちから袋叩きにされないように。でもジョージにはわかった—どうやらベンは問題ない。ウサギでも1匹買って帰るか。

結局3匹のウサギを連れて帰ったが、そのうち1匹は犬に食べられてしまった。厳密に言えば

4 ポークスのフォーク・ソング、「アイリッシュ・ローパー」の一節。この曲は1987年に主にアイルランドやイギリスでヒットした。

犬は食[・]べ[・]た[・]のではない。ウサギの脾臓に穴をあけて、勝手口の踏み段にほっぽっておいたのだ。ウサギは一見完璧で、そのため一層死んでいるように見えた。

「苦しむことになるでしょう。」アイルランドは次の10年どのように対処すべきかと聞かれて、例のクルーグマンはそう答えていた。そうだ、ここには苦しんでいる俺がいる。

あの頃、新しい住宅ローンを組んで金がなかったあの頃、国が景気づき目覚め始めたように見えたあの頃、未来は長くまっすぐに伸びる浜辺みたいだった。サンドラを抱いて大丈夫だと言えば、それで良かった。最初の流産、サンドラの父親の死、それから自分自身の健康問題—あの頃は何かかなと信じて疑わなかった。

ジョージはパブの外に立っているが、窓の方には近づかない。ベンが外を見て彼を見つけないように。ベンが今日仕事なのか、或いは早番なのかさえジョージにはわからない。

なくなってしまった。あの頃の確信なんて。傲慢だったわけではない。それともそうだったのかな—自分にはわからない。罪や犯罪を犯したようには思わない。誰も搾取しなかったし、投資もやらなかった。今、ローンが一つ、クレジットカードが一枚。ローンがあるのに仕事はない。ローンはあと7年残っているが、くそいまましい仕事に就ける見込みもない。そのうち……ほとんど引退する年になってしまう。失われた10年を俺はずっと生きていく。10年経っても引退するものはないし、今、自転車置き場に繋いでいる犬だってその頃には死んでいるだろう。そうしたら犬はもう飼わない。ここにるのが最後の動物だ。

娘たちは勝手口の踏み段で死んだウサギを見つけて、ヒステリーを起こした—皆ヒステリックになった。でも誰も犬を責めなかった。犬の本能、犬の性質なのだから仕方ないと。だからジョージはあの犬を処分できなかった。けれど、次にあいつはベンの子に噛みついた。くそいまましい性質だ。犬は獣医のところに送られ、ジョージも苦痛から解放された。

—それでいいんだ。

ゲーフィというのがその犬の名前だった。サイモンはベンの子の名前。サイモンはいい子だったが、犬はろくでなしだった。奴はしつけを拒んだ。冷蔵庫の前で片足を上げて小便をしながらジョージをじっと見つめ返した。ばか野郎が。でも、ジョージはこの犬が性悪のあほうだということを隠していた。もしかしたら家族がこんな怪物を作ってしまったのかもしれないということも。毎朝彼は一番に起きて、皆が目覚ます前に台所の床にした犬の不始末をモップでふき取り、子供たちがココポップスやアルペンのシリアルを食べに来る頃までに清潔で松の香り⁵がする台所にしておいた。ゲーフィーがサイモンに噛みついたとき—ジョージがそのことを知ったとき—サンドラが職場に電話してきたとき、彼は車へ走ったが—実際はとてもほっとして罪悪感など全く感じなかった。サイモンは二針縫い、ゲーフィは安楽死。サイモンの両親にはリオハ産の上等なワインをお詫びに持って行った。

彼はゲーフィも、その後に来たシンパという不運なばか犬も埋葬しないで済んだ。ジョージは車をバックさせたときシンパを轢いてしまった。—キャンという鳴き声、ドンとぶつかる音—車から飛び出したが、この時もまた安堵したのだ。車輪の下敷きになったのが子供たちの誰かでないとわかって。周りを見回した。自分一人しかいない。シンパの首輪をつかんで家の正面の門まで引きずって行った。道路を見渡して、袋小路に住んでいることを神に感謝し、シンパを何とか道路まで引きずって運んだ。それから家に入って子供たちに悪い知らせを告げた。どこかのバカがシンパを轢いちゃったんだと。子供らの涙を拭き、アイスクリームやエビのクラッカーを買っ

5 松はしばしば家や車内で芳香剤として使われる。

てやると約束しながら、ジョージは得意な気分になった。実際に起きたことは誰にも言わなかったし、隠したことについて悪いとは全然思わなかった。道の向こうの婆さんが彼をまるで戦争犯罪人みたいに見ていたし、道路に「証拠物件 A」を引きずって行った時も窓から見られていたかなとは思っただけだ。でも大して気にしなかった。いずれにしてもその婆さんはもう死んでいる。今ポーランド人の連中があの家を借りている—いや、もう借りてないか。あそこはこしばらく静かだし、ポーランド人はどこかへ移ってもういないのかもしれない。空港の駐車場に車を捨てていくとか言われている。駐車場はそんな車でいっぱいなのだろう。

彼は犬を軽くたたく。とても小さな犬だが、風が強い日には毛が後ろに煽られてさらに体が小さく見える。

—20分だよ、と彼は言う。

実際、通りで犬に話しているのだ。俺、どうかしているんじゃないか。

体を起こす。犬を見下ろす。ここに置いていけない。誰かに盗まれるかもしれないし、革紐がゆるんで一通りに走り出してしまうかもしれない。ここに置いていつてはだめだ。

パブのドアを押す。想像通りだ—ひっそりとしている。誰もいない。カウンターの後ろにも。ドアのところで彼は待ち—店の中には入らない。犬から目を離したくないのだ。その時薄暗がりには白いシャツが見えて、ジョージには誰の顔かわかる。息子のベンだ。

—パパ？

—ベン。

—元気？

—元気だよ。犬を外に—

—ここに連れてきたら。

—お前に迷惑をかけたくないんだ。

こんなことを言うべきじゃなかった—変に聞こえる。まるでベン—ベンの仕事を見くびっているみたいだ。

—大丈夫、とベンが言う。—パパの盲導犬だって言えばいいよ。

ベンがカウンターの後ろから出て来た。22歳だが、6年前から急にひょろっとしてきて今もそのままだ。

—僕が連れてくるよ。

ベンはジョージの前を通り、赤ん坊みたいに犬を抱いてすぐ戻ってくる。

—もうくそは済ませてある、とジョージが言う。

—そりゃ良かった、とベン。—僕もだよ。

ベンは犬を床に下ろして革紐を背の高い腰掛けの足に結わえつける。

—パパ、ここに座ってよ、と彼が言う。—犬が椅子を倒して怪我しないようにさ。

—ああ。

ジョージは座る。それから立って、ジャケットを脱ぐ—ジャケットを着るには暑すぎる。置いてくれば良かった。彼は再び腰を下ろす。

—静かだな、とジョージが言う。

—うん。

—不景気ってやつか？

—そうでもない、とベン。—この時間はいつも静かなんだよ。何か飲む？

—コーヒーはどうか？

—コーヒーないんだ。

—ないのか？

—ない。やかんが要るものは置いてないんだ。

—じゃあ、1ポイントもらってみるか。

彼は、ベンがビールの注ぎ口の下でグラスを正しい角度に傾けるのを眺めている。今までベンが仕事をしているのを見たことがなかったが、店が混みあって飲み物を注文する声が飛び交っていたとしても、こいつはこの通り落ち着いているだろうと思う。

—パパ、調子はどうなの？

—いいよ。問題ない。

—ママはどうしてる？

—元気さ、とジョージは言う。—とってもな。ウサギのこと、覚えてるか？

—ウサギ？

—ウサギの小屋のこととかさ。グーフィが1匹殺しちゃっただろう。覚えてるか？

—うん。

ベンはまだ注ぎ口の下にグラスを戻す。1ポイントのグラスいっぱいにつぎ足す。ジョージの前にコースターを置く。グラスをその上に載せる。

—いいね。

ジョージはポケットから10ユーロ出してベンに差し出す。

—取ってくれ。

ベンは受け取る。後ろを向いてレジに行き、レジを開けて10ユーロを入れ、釣銭を出す。ジョージのグラスの横にそれを置く。

—ありがとう、とジョージ。—確かウサギは3匹いたよな？

—うん、とベンが言う。—あまり長くはいなかったけどね。

—名前、何だっけか？

—ライザ、ブリージー、ドーナツ。

—で、グーフィーがブリージーを食っちゃったんだな。

—ライザだよ、とベン。—何で？

—いや、何でもないんだ、とジョージが言う。—大したことじゃない。ちょっと頭に浮かんできた。

ビールの泡も落ち着いてきた。ジョージには久々に飲むビールだ。少し飲んでみる。

—うまい。

—良かった。

—いいビールだ。

—ありがとう。

—この仕事気に入っているのか？

—大丈夫、とベンが言う。—うん、そうだね、好きだよ。

—良かった、とジョージが言う。—良かったな。

ジョージは後ろでドアが開く音を聞く。犬を見下ろす。犬はじっとしている。

—いい子だ。

ベンはカウンターの中を移動して今来た客を迎える。

ジョージはその犬がとても気に入っている。本当にすごく好きなのだ。キャバリアの雌。白と

茶のキングチャールズ・スパニエルだ。ジョージは犬を抱き上げて肩に載せるのが大好きだ。何をしているのか自分でもわかっている。子供の代わりにしているのだ。しかし、所詮は犬だし、しかも不幸な運命ときている。ジョージはスカイ・テレビで「死に向かう繁殖」というドキュメンタリーを見た。純血種の犬についての番組だった。テレビでは彼の犬と同じ、キャバリアが1匹、白衣を着た綺麗な女性の膝に座っていた。獣医か科学者だった。そして、女性はその犬の脳が大きすぎるということを説明し始める。―「サイズ10の大ききの足がサイズ6の靴に押し込まれているようなものです。」ブリーダーは神の真似ごとをして母親と息子、父親と娘、兄弟同士といった交配をしてきた。見た目を良くするため―ドッグ・ショーなどで―純血種としての容姿が「定着」していることをアピールするために。その結果、パグの目は飛び出し、ブルドッグは自然交配ができなくなり、ペキニーズの肺はハエ一匹飛ばすこともできないほど弱くなっている。そしてジョージの犬も脳が頭から押し出されて脊柱までのめり込んでいるのだ。

彼は体をかがめて犬を抱き上げる。片手でできる。殆ど重さが無い。

ベンがビールの注ぎ口のところに戻っている。カウンターの向こうの端にいる客のためにハイネケンを1パイントついでいる。

ジョージの膝にのっている犬は時限爆弾のようなものだ。

犬はいつかキーキー泣いたり、ぐずったりするようになるだろう。万事休すってわけだ。

そうしたらもう犬は飼わない。

―シンバのこと覚えているか？

ベンはグラスから顔を上げた。

―うん、覚えてるよ。なんで？

―俺がぶつけたんだ、とジョージが言う。

―パパは犬に手を上げたことなんてなかったじゃない。

ベンは当惑した顔をする。

―違うんだ、とジョージは言う。―車でぶつけたんだ。

―車で？

―バックしたときに轢いたんだ。

―どうして？

―わざとじゃない、とジョージは言う。―車をとめようとしてたんだ。

ベンは見事だ。ビールをグラスいっぱいにつぎ、客のところへ持って行く、金を受け取る。急いだり、ジョージをじろじろ見たりしないで全てやる。

ベンが戻って来る。

―何で言わなかったの？

―そうだな、とジョージは言う。―よくわからない。轢いたのがお前たちの誰かじゃないとわかったらどうでも良くなったんだな。それで思い切ってシンバを道路へ引きずって行ったんだ。で、やっちゃったら、もう元のところに戻すってわけにはいかないだろ。

―何で今？

―何で今言うのかって？

―うん。

―わからない。ちょっと考えてたんだ―わからない。

―問題ないよ。

―そうだな、とジョージは言う。―でも、あの時だったら大変だっただろう。お前たちが皆小

さかった時には。

—ううん、とベンは言う。—あの時だって大丈夫だったよ。

—そう思うか？

ベンはカウンターに目を向けた。

—聞いて、とベンは言う。—最高のパパだって俺たちみんなわかってたから。

ジョージは何も言うことができない。

この犬の脳みまいに、俺の心臓もでかすぎるのだ。血が目や口へとぐんぐん上って行く。俺と犬、一緒に爆発だ。

3. 終わりに

「動物たち」では現在と過去が微妙に交錯する。主人公の中年の男、ジョージは現在失業中。将来への不安に加え、成長した子供たちは既に家を出ていて寂しさを感じている。彼が回想する子供たちとの思い出には常にペットの存在がある。魚、フィンチ、犬、モルモットにウサギ。こうしたペットの死も何度も経験したジョージであるが、今では自分自身の老いや死を意識している。ドイルは自由間接話法や会話を駆使して、いわゆる「中年の危機」(“midlife crisis”)にあるジョージの心理を見事に捉えていると言えよう。この短編集の他の作品と同様、物語の中心は男であり、また、ジョージと息子のベン、ディランといった男同士の繋がりである。とりわけ長男のベンに対してジョージには格別の思いがある。一方、妻のサンドラは存在感が薄く、双子の娘に至っては名前すら出てこない。作品の後半では、ジョージとベンのかみあわない会話や、クールな顔をして仕事をするベンの様子が巧みに描かれているが、最後にそのベンが「最高のパパだった」と、ジョージがまさに必要としていた言葉を贈る場面にはささやかな感動を覚える。

作品の舞台は、「マンボ・キングス」やボーグス、クルーグマンのノーベル賞受賞等への言及から、1980年代後半から2010年頃のアイルランドと推定される。ヨーロッパの中でも貧しい小国だったアイルランドはEUからの補助や、低税率政策による海外企業誘致などが奏功して、1980年代後半から経済が活性化し始め、特に1995年から2007年には「ケルティックタイガー」と呼ばれるような急速な経済成長を遂げ、富裕国の仲間入りを果たした。物語にも示唆されているように、当時のアイルランドにはポーランドなど中東欧から多くの労働者が流入したという。しかし2008年にはいわゆる不動産バブルの崩壊から銀行が不良債権により相次いで破綻するなど、アイルランドは一転して深刻な不景気に陥る。「ローンはあるのに仕事はない」というジョージの状況の背景にはこうした国の実情がある。ドイルは時代の閉塞的な空気を織り交ぜて、ジョージの不安や孤独、喪失感などを鮮やかに描き出している。

使用テキスト：Doyle, Roddy. “Animals.” *Bullfighting*. New York: Penguin, 2011.

参考：武南奈緒美「転換期を迎えたアイルランド経済～住宅バブル崩壊の影響と新規EU加盟国への示唆～」『経済レビュー』三菱東京UFJ銀行、平成20(2008)年6月26日。pp.1-8.
www.bk.mufg.jp/report/ecorevi/2008/review/20080626.pdf

海老島均、山下理恵子編『アイルランドを知るための70章』明石書店、2011年。pp.104-112.